

機関番号：13801
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20520436
 研究課題名（和文） 日英語を中心とした情報構造上の概念についての多角的研究
 研究課題名（英文） Information Structural Notions in English and Japanese
 : A View from Formal and Cognitive Pragmatics
 研究代表者
 河村 道彦（KAWAMURA MICHIIHIKO）
 静岡大学・教育学部・准教授
 研究者番号：00283325

研究成果の概要（和文）：

本研究は、形式語用論と認知語用論という異なる角度から情報構造上の概念を洗い直し、日英語の言語事実を詳細に検討しながら、その理論的な意義を再構築しようとする試みである。日本語の「対照主題」の解釈が主題句の語彙的意味と談話解釈の一般原則との相互作用によって生み出される擬似的な概念であること、英語の冠詞や存在文の分析において「既出性」の概念によって十分な説明を与えることができないことなどを明らかにした。また、本研究の知見を教育英文法の記述に反映させるための提案を行った。

研究成果の概要（英文）：

This study investigates into some basic notions of information structure from two distinct perspectives: formal pragmatics and cognitive pragmatics. In particular, the need for contrastive topic as an information-structural primitive and the role of givenness in the descriptions of (in)definiteness in English are critically examined. Implications for pedagogical English grammar are also discussed.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究代表者の専門分野：意味論

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：情報構造、形式語用論、認知語用論、対照主題、定性、there 構文

1. 研究開始当初の背景

「主題」や「焦点」といった概念が関与する、一般に「情報構造」という名のもとに包括さ

れる諸現象は長年に渡り多くの研究者の関心を集めてきたが、近年、音韻論、統語論、意味論、語用論など複数の言語部門が相互作用する場として理論的な注目を集め、いくつ

かの重要性な展開を見せている。

その一方で、「主題」や「焦点」、「既出性」、「新情報・旧情報」といった諸概念は、分析の対象とする言語や言語現象の性質、関連する言語部門の別、分析の際に採用する理論的な枠組みなどによって表されるものが多様にわたり、対象となる言語現象や研究分野の異なる分析の単純な比較を困難なものにしている。また、これらの概念の定義は、極めて単純な文脈を想定して作られた基本的な例をもとに特徴づけられている場合が多く、豊富な言語使用の実態を正確に反映しているとはいいがたい。実際、分析の対象となる言語の断片を広げれば、標準的な定義では立ち行かない様々な事例に遭遇することになる。

本研究は、形式語用論と認知語用論という2つの枠組みを相互補完的なものと見立てたうえで、「既出性」や「関連性」などの談話上の概念が「情報構造」に関する文法現象とどのように関わっているのか、日英語のデータの実証的な分析を通じて探求するものである。

研究代表者（河村）は、文法と談話のインターフェイスとしての日本語の「主題」について形式語用論の観点からいくつかの提案を行ってきたが、主題が表す関係性や文脈との適合性など、談話情報のあるべき姿とその管理のメカニズムの解明が未解決のまま残っており、これが本研究を行う上での直接の動機づけとなっている。

一方、研究分担者（内田）は、生成統語論および機能構文論の立場から情報構造の分析を行っており、その過程で「既出性」の概念の限界と聞き手の推論の果たす役割に着目し、関連性理論に基づく認知語用論的な説明を模索していた。

「情報構造」に関する現象の解明という記述面を中心に考えた場合、2つのアプローチの主たる違いは、厳密さと柔軟性のどちらを優先するかという、単なる方法論上の違いと見立てることが可能である。異なる方法論に基づく研究が相互に意思疎通を図りながら協力して研究を進めることにより、情報構造上の概念の精緻化を計るとともに人間のコミュニケーションの理論の構築に貢献できるという認識に達し、本研究を応募するに至った。

2. 研究の目的

(1) 形式的な意味理論において、発話の意味は文脈に与える変化であると考えられている。ここでいう文脈とは、話し手や聞き手が共有すると想定する外界および談話についての知識のことであり、現在、命題情報と談話情報の相互作用が記述できるような理論

が模索されている。「情報構造」は、このような理論的研究の中核をなす現象の1つであり、本研究はその基本概念の解明に個別言語の詳細な分析を通じて貢献しようとするものである。

(2) 論理的な意味論の一領域としての形式語用論と関連性理論の枠組みに基づく認知語用論は、ともに Grice のコミュニケーション理論の流れを汲んでいるにもかかわらず、各々が独自の問題意識のもとに独立した研究を行っている。本研究では2つのアプローチが協力しながら同じ言語現象の解明にあたり、これにより理論的な棲み分けがなされた分野における知見を有機的に結合することを目指す。形式語用論研究者と認知語用論研究者が討議を重ね、相互補完的に言語事実の解明にあたるという、英語学における新たな研究形態の可能性を追求するものである。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、以下のような役割分担に基づいて個人ベースで研究を行うとともに、双方のアプローチについての建設的な相互批判や、今後の展望についての積極的な意見交換などを行い、これを研究代表者である河村が総括するという形を採った。

- ① 談話構造と修辞関係に着目した情報構造上の概念の形式語用論的分析（河村）
- ② 語用論的推論と発話の意図に基づく情報構造上の概念の認知語用論的分析（内田）

(2) 本研究は談話情報や推論といった語用論的な側面に焦点をあてた研究であるが、情報構造は、韻律・統語・意味・談話など複数の言語部門が相互作用することによって成り立つものである。このため、まず初めに分析の対象となる言語現象において、語用論的な要因とそうでないものの切り分けを行う必要があった。

そのため、本研究の初年度にあたる平成 20 年度は、言語の普遍性と個別性に注意を払いながら、形式語用論、認知語用論、それぞれの立場から、諸言語の情報構造および情報構造の理論についての先行研究の洗い出しと整理を行った。

(3) 平成 21 年度以降は、前年度に得た知見のもとに積極的に意見交換を行い、それをもとに、形式語用論の観点からは「主題」や「既出性」の概念について、特に韻律や談話構造との関連を中心に、認知語用論の立場からは、「既出性」や「関連性」の概念について、特に英語の有標構文に焦点をあてて考察する

こととした。

(4) データの検証や言語事実の発掘には各種コーパスを使用した。定量的な分析に不向きな微妙な意味解釈を扱うため、比較的ランダムに収集した小規模なデータの形式的、意味的特徴を考察するという限られた利用法に留まった。

4. 研究成果

(1) 形式語用論分野での成果

認知語用論分野では、情報構造上の概念の標示や文脈情報との繋がりを中心に、以下のような研究を行った。

①日本語の対照主題の意味論・語用論と韻律の関係を論じ、主題句のもつ語彙的な意味と談話解釈の一般原則との相互作用による説明を提案した。その結果、「対照主題」という概念が従来考えられていたような原始的なものではなく、既出性や韻律、修辞関係などの相互作用によって産み出される擬似的な現象であるという結論に至った。

より具体的には、日本語の係助詞「は」によって表されるとされる対照主題の解釈の意味論と語用論について論じ、対照主題を表す「Xは」の「X」に韻律的卓立を置くか、「は」に韻律的卓立を置くかによって異なる解釈が得られることを指摘した。

対照主題のもつ、この2つの解釈は近年の研究においては区別されることがなく、いずれも単なる対照主題として扱われており、両者の意味的な違いに原理的な説明が与えられることもなかった。

本研究では、対照主題のもつ2つの解釈とそれに関連する幾つかの言語現象が「は」の語彙的な意味と、焦点と韻律の関係および Roberts (1996) や Buerling (2003) で提案される談話語用論の一般原則との相互作用として説明されうることを明らかにした。

この分析により、2種類の対照主題が常に同じ環境で生起可能でないこと、2種類の韻律が可能な場合に意味の違いが明白な場合と何ら語用論的な相違が存在しないようにみえる場合があるなどの言語事実が説明される。

また、この研究の帰結として、(a) 情報構造上の概念として、「対照」や「類似」といった修辞関係を取り扱う必要があること、(b) 主題と発話行為の関連は可能世界の集合に基づく Rooth (1985) の交替意味論では扱うことができないため、Stechow (1991) などによる構造化された意味に基づくアプローチが有効であることが示された。

本研究では、対照主題と韻律の関係に焦点

をおいた分析を行ったが、そこから生まれた仮説が単なる主題や単なる対照を表す句の分析に拡張できるか、それは(非)文主題の統語論に裏付けられるものかなど、まだまだ精密な議論が必要な点が多く残されている。その詳細な研究は今後の研究課題とした。

②英語の名詞句の定性について論じた。その結果、様々な用例における冠詞の定性について、(a)可算、不可算のどちらとして扱われているか、(b)可算の場合には個体を表すか種類を表すか、(c)個体を表す場合は「不定の the」と呼ばれる慣用的な解釈が許されているかの3点を明確にすれば Roberts (2003) のいう「語用論的唯一性」の概念をもって説明できるという一応の結論に至った。

その他、「不定の the」を一意的識別可能性に基づいて節用しようとする織田 (2003) などの分析が十分な記述的妥当性をもたないこと、種類の解釈が可算性とは独立した要因によって動機づけられている可能性があることなどを示した。

ただし、非可算領域における定性の分析、とりわけ抽象名詞と可算性、定性の関連や種類の解釈が発生するメカニズムについては、形式化に向け今後さらなる検討が必要になるものと思われる。

(2) 認知語用論分野での成果

認知語用論分野では、英語の存在を表す有標構文の機能分析に占める情報構造上の概念の役割を中心に、以下のような研究を行った。

① there 構文、have 型構文、be 型構文の3つの存在を表す構文について、これらの構文の間の選択原理を情報構造との関連において考察した。その結果、情報構造的な要因のほかに be 動詞と have 動詞の間の機能的相違や動詞に内在する情報の提示性の差などの要因が関与していることが分かった。

② there 構文に関する3つの言語事実を題材として、認知言語学的分析と生成文法的分析との接点を探った。

(a) there 構文に用いられる動詞には、be 動詞のほかに一般動詞があり、自動詞の他に他動詞も用いられることがある。

(b) there 構文に現れる意味上の主語名詞句は、新情報を担うことが多いが、形態に対する制限はなく、冠詞も定・不定の両方が可能である。

(c) 一般動詞が用いられる there 構文には、意味上の主語である名詞句が文末にくるものがある。

まず、(a)の認知について考えてみよう。言

語学の立場からすれば、構文内の要素の配列に関する相違は何らかの意味ニュアンスの相違を反映したものであるとの観点から分析される。したがって動詞の種類別に、それぞれの配列の型が存在するのは、認知上の範疇化現象のあらわれであると考えられる。これに対して、生成文法では、派生そのものが異なるので、そこに習得上の優先性が潜在しているという立場をとる。しかしタイプ分けしなければならないという立場はこの構文では共通している。言い方を変えれば、派生の一本化を理想とする生成文法でも、一筋縄ではいかないことを示唆する。

次に(b)について。従来 **there** 構文には、定冠詞 **the** を伴う名詞句は意味上の主語位置には現れないと言われてきた。また固有名詞や人称代名詞、**this/that, these/those** を伴う名詞句も現れないと言われてきた。つまり、このような名詞句は、指示対象が特定されて、聞き手がその指示対象を了解している定名詞句であり、定名詞句は **there** 構文の意味上の主語にはならないと言われ、この制限は「定性制約」と呼ばれている。

しかし、**Ward & Birner (1995)** や **久野・高見(2004)** などでも指摘されている通り、定冠詞を伴う名詞句や代名詞であっても、談話や文脈によって新情報を表わす場合がある。したがって、「定冠詞を伴う名詞句は旧情報を、不定冠詞を伴う名詞句は新情報を表す」という単純な区別は妥当ではない。

最後に(c)について。一見奇異に思われる、この種の **there** 構文の配列は、動詞の非対格性といった語彙的統語的な特性や名詞句の定性や既出性といった情報構造上の概念だけでは決まらず、これを説明するためには意味上の主語にあたる名詞句を導入するための場面設定が適切に行われているかという機能的な要因を考慮に入れる必要があることが示された。具体的には、「意味上の主語の左側の要素が、話し手にとって観察可能な存在か出現を表さなければならないという高見・久野(2002)の説明がタイプの異なる **there** 構文を一般化する上で最も有効である。

③聞き手の情報への関与を重視する立場から、**there** 構文を関連性理論における最適性の問題として分析する可能性について検討した。

これについては明確な方向性を示すことはできなかったが、例えば、定冠詞と不定冠詞の対立などは、最適性の条件と関連づけて説明ができるのではないかという予測に至った。

(3) 研究の総括と展望

一般に、形式的な談話研究では厳密な議論が行われる一方で、形式的な道具立てが整備

されていなかったり形式的な特徴づけと親和性が低いとみられる現象について論じられることはあまりなかった。本研究では、言語現象の記述するうえで形式的な議論と認知言語学的な議論を相互補完的に使い分けるという方策をとり、言語現象の多様性の記述に一定の可能性を示すことができた。

形式語用論の分野では現在、最適化語用論や確率に基づくモデルなど、文脈における語用論的推論を扱うための、より柔軟な道具立ての整備が急速に進んでおり、今後は双方向のフィードバックにより、談話の構造や結束性を重視する形式語用論的なアプローチと手続き的な意味や語用論的な推論を重視する認知語用論的なアプローチが接近し、人間の言語処理過程を解明する統合的な理論として発展する可能性の追求が期待される。

(4) 教育英文法への応用

研究代表者、研究分担者ともに英語教員養成に携わっていることもあり、それぞれの研究成果の一部を教育英文法の改善のための議論とその実践に活用した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 河村道彦、英語冠詞の定性と意味記述、静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)、査読無、42号、2011、43—56
- ② 内田 恵、定性効果と **there** 構文、静岡大学教育学部研究報告(人文・社会・自然科学篇)、査読無、61号、2011、79—88
- ③ 河村道彦、対比の「は」と韻律に関する予備的検討、静岡大学教育学部研究報告(人文・社会・自然科学篇)、査読無、60号、2010、59—71
<http://ir.lib.shizuoka.ac.jp/handle/1029/7/5236>
- ④ 内田 恵、教育のための英文法、静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)、査読無、40号、2009、85—96
<http://ir.lib.shizuoka.ac.jp/handle/1029/7/4305>

[学会発表] (計1件)

- ① Kawamura, Michihiko The Contrastive Topic: Not Simply Contrastive + Topic, Texas Linguistic Society XII, 2009年11月15日、The University of Texas at Austin, U.S.A.

〔図書〕（計2件）

- ① 内田 恵（編著）、『ちょっとトクする英文法』、2011、総235頁、静岡学術出版
- ② 内田 恵（分担執筆）、澤田治美・高見健一（編）『ことばの意味と使用：日英語のダイナミズム』、2010、36—46、鳳出版

6. 研究組織

(1)研究代表者

河村 道彦 (KAWAMURA MICHIIHIKO)
静岡大学・教育学部・准教授
研究者番号：20520436

(2)研究分担者

内田 恵 (UCHIDA MEGUMI)
静岡大学・教育学部・教授
研究者番号：80185032

(3)連携研究者

なし